

## 協力校としての取組

### 糸魚川市立浦本小学校

#### 1 研究主題

自らの考えをもち、進んで伝え合う子ども

#### 2 主題設定の理由

当校では、平成 26 年度の重点目標を「自ら進んで取り組む子ども」とした。子どもの主体性を育成することを主眼とし、これを軸に学力の向上と社会性の育成を目指した。そして、学校重点目標から研究主題を「自らの考えをもち、進んで伝え合う子ども」と設定した。自ら進んで取り組むためには、自分なりの考えをもつことが必要である。授業では、課題意識や学習意欲を高める学習の導入により、主体的に学ぶことが可能である。相手の考えに共感したり、自分の考えを話したりすることにより、進んで伝え合うことができる。伝え合う活動により、自分の考えが深まったり、新しい考えを発見したりすることにつながっていく。自らの考えを検証したり比較したり、変化させたりするためには、友達とのかかわりが欠かせない。友達とのやりとりの中で子どもは、自ら学習内容を獲得していく。かかわるためには、考えをもつことが必要である。以上のことから、研究主題を設定した。

#### 3 研究の内容

①全ての子どもが「考えをもつ」ための方策

○「考えをもつ」学習活動の様々な工夫

「自分の考えをもつ」には、進んで学習を行っていく意欲が重要である。そのために、課題意識を高める、意欲を高める導入の工夫が必要である。しかし、課題を理解できないことには、学習を進めていくことができない。そこで、問題を読み取る力を高めることにも力を入れた。また、自分で学習方法などを選択できる学習を行うことで、意欲を高めるだけでなく、学習課題を自分ごととしてとらえることができると考えた。そこで、同様の学習課題に対して、複数の学習活動から選択させる場面を設けた。

○授業者が主導したり、子どもが主体的に学んだりすることが明確な授業づくり

子どもには既習事項や経験などから自らの考えを構築している。しかし、子どもの力だけではよりよい構築は難しい。そこで、教師が教えること、子どもが考えることを明確にして授業を考えた。授業構想を具現化するために、課題や本時のねらいを明確にし、まとめがある板書を計画し授業を行った。

②全ての子どもが「進んで伝え合う」ための方策

○進んで伝え合う場面設定の工夫

授業の中で自らの考えを伝え合う場面を設定した。当校の子どものかかわり方は、考えを伝えただけでお互いに満足してしまっている場合が多い。しかし、これだけでは子どもの考えの変化や深化は見られにくい。昨年度までの研究で進めてきたモラルジレンマ資料を用いた道徳授業のように、自分から話したい、伝えたいと思わせるような課題設定が必要である。また、考えを伝え合ったことによる成果が実感できるような場面を工夫することで、進んで伝え合う姿を目指した。

#### ○話し方・聞き方のスキルの指導

進んで伝え合うためには、話す力と聞く力の両方を高めていくことが必要となる。そのために、「話し方・聞き方の基本」を作成し、話す力と聞く力を高められるように取り組んだ。

#### 4 学習児童改善調査の結果分析から

学習指導改善調査の結果を分析したところ、以下のような実態が明らかになった。

##### (1) 国語

###### ○調査結果から、良い傾向がみられる点

- ・段落を考えて文章が書けた。(6年)
- ・立場を明確にして、段落を意識し、規定量の文章を書けていた。(5年)
- ・資料の読み取りが、正確にできていた。(4年)

###### ▲調査結果から、課題としてあげられる点

- ・課題に沿った、意見文が書けなかった。(6年)
- ・主語と述語のねじれた文章を書いていて、正しい文章を書けなかった。(5年)
- ・課題に沿った、意見文が書けなかった。(4年)

##### (2) 算数

###### ○調査結果から、良い傾向がみられる点

- ・分数の計算ができた。(6年)
- ・問題を考えたときに、図に表して考えることができた。(5年)
- ・表の数値について理解し、棒グラフにかき換えたものを選ぶことができた。(4年)

###### ▲調査結果から、課題としてあげられる点

- ・割合についての理解が不足していた。(6年)
- ・四捨五入、2次元表についての理解が不足していた。(5年)
- ・算数用語を使っての説明ができていない。(4年)

## 5 実践例

### <実践例1> 1年算数「ひき算(2)」

#### (1) 本時のねらい

減法が用いられる場面であることを理解し、立式して各自の方法で答えを求める。

#### (2) 本時の手立て

##### ①一人ひとりが問題を読み取るための支援

問題文には減数が先で被減数が後に出てくるため、 $9 - 13$ と立式する児童がいることが考えられるので、ひきざんのキーワードを取り上げ、減法が用いられる場面であることを理解させた。大きな数から小さな数をひくことを理解させた。また、問題の場면을簡単な絵に表す活動を入れた。自分の考えをワークシートに書き表すことにより、問題の意図が読み取りやすくなり、考えをまとめやすかった。

##### ②考えを共有するための視覚化した板書

視覚化することで、お互いの考えが自分と同じか違うかなど比較しながら、伝え合うことができると考え、ワークシートに個々の考えを表し、板書することで、全体の共通理解を図る一助とした。

#### (3) 成果と課題

ひき算のキーワードを取り上げることで、減法であることを理解し、正しく立式することができていた。また、図をかくワークシートを使うことにより、互いの考えの違いや共通点を探す手がかりとなった。だが、図をかくことと式を理解することが結びついていないと思われる児童もいたことが課題となった。

### <実践例2> 2年国語「わたしはおねえさん」

#### (1) 本時のねらい

すみれちゃんのお姉さんらしくなっていく心の変化に気付くことができる。

#### (2) 本時の手立て

##### ①見通しがもてる板書や掲示物の工夫

前時までには、すみれちゃんがしたことや言ったことについて本文に線を引き、心に残ったことをカードにまとめた。すみれちゃんと自分を比べたり、そこで話し合われた内容や気付いたりしたことを大洋紙にまとめて掲示した。自分の考えを振り返り、友だちの意見を認め合うことで新たな考えが生まれた。また、黒板に本時のめあてや学習の流れが書かれた内容を板書しておくことで、課題を意識して、見通しをもって学習に取り組めた。

##### ②話し合いが活発に進められる「やくそく」の掲示

3つのやくそくを確認し、色分けをして線を引くことで、すみれちゃんの心の変化を読み取ることができた。また、課題ごとに3本までと決めることで子ども同士がじっくりと考え、すみれちゃんの気持ちを考えながら読み取る活動ができた。

#### (3) 成果と課題

全文を掲示し、前時までの登場人物について考えたことを一目で見ることができ、本時で読む場面と比較して考えることができていたのがよかった。本文をじっくりと読む時間が少なく、読む学習では、本文を何度も読み直し、考えられるようにすることが課題となった。

### <実践例3> 3・4年複式授業

#### 3年算数「わり算」

##### (1) 本時のねらい

・  $36 \div 3$  の答えを見つける方法を考え、答えを求めることができる。

##### (2) 本時の手立て

###### ① 意欲を高めるための導入の工夫

教師が巻物になっている数表を少しずつ開いていき、子どもたちに九九表の一部であることに気付かせる活動を行い、3でちょうどわるる数を見つける意欲を高めた。

###### ② 自分で方法を選択できる学習活動の工夫

$\square \div 3 = \square$  や  $\square \times 3 = \square$  の式をかけるプリントを準備したり、36の丸印の紙を準備したりするなどして、36はちょうどわるるか、求め方がわからない子どもたちへの支援プリントを準備し、用いた。

###### ③ 伝え合う場面設定の工夫

伝え合う内容が深まるように、発表するときには、式や図を指さしながら説明を行い、「～さんの意見につけたしです。」「～がわかりません。」といった話し合いに使う言葉を提示し、繰り返し使えるようにした。また、仲間がかいた式や図を説明する場面をつくることといった伝え合う場面を工夫した。

##### (3) 成果と課題

導入の工夫により、3・4年共に、意欲付けができていた。また、前時までの学習内容を掲示し、考える手がかりとなって有効であった。複式学級では、特に間接指導の場面で、子ども同士がかかわり合える場面を設定することが課題となった。

#### 4年算数「いろいろな四角形」

##### (1) 本時のねらい

・ ひし形の定義や辺や角の性質を理解する。

##### (2) 本時の手立て

###### ① 意欲を高めるための導入の工夫

導入時に、折り紙を2つに折って、1か所をはさみで切っていくつかの四角形を作り、自分で切った四角形の共通することを探す活動を行った。意欲を高めるように、操作活動を導入段階に行い、効果があった。

###### ② 授業者の主導場面と、子どもの主体的な学習場面の明確な授業づくり

四角形の共通した秘密をさがすことは、子どもたちの主体的な活動とし、ひし形という名前とひし形の定義について授業者が教えた。本時のねらいやまとめのある板書ができるように板書計画を行い、子どもが見付ける内容、授業者が教える内容を区別した。

### <実践例4> 5年算数「分数」

##### (1) 本時のねらい

分数のきまりを用いて、分母・分子の数が大きい分数を簡単な分数に表す方法を考え、約分の意味や約分の仕方について理解する。

##### (2) 本時の手立て

###### ① 解決意欲を喚起する導入の工夫～ゲームをもとにした課題提示～

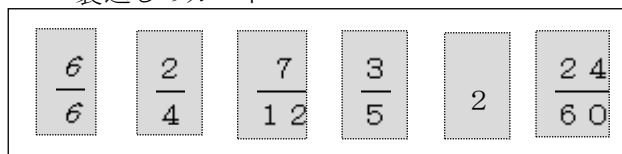
導入では、既習事項(分数のきまり)を生かして、分数ゲームに挑戦した。分数ゲームを通して、本時の課題を児童自身がつくり出すことが出来るように仕組んだ。こうすることで、課題解決への意欲を高め、進んで考えるようにした。

###### 【ピタリ分数ゲームのルール】

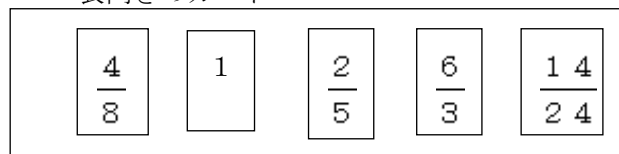
全てのカードに分数を書いておき、裏返しになっているカードをめくり、出た分数と同じ大きさの分数を表向きカードから選択して、同値分数のペアを作り出すゲームを行った。裏返しのカードには、1枚

ペアにならない分数を入れておいた。24/60は分子も分母も大きいため、2/5と同じ大きさであることを見付けにくいことが予想されたので、児童の24/60=2/5となることへの疑問をもとに、本時の課題を提示した。

<裏返しのカード>



<表向きのカード>



## ② 課題解決の見通しをもたせる工夫

これまでの学習で児童が発見した「分数のひみつ」を掲示し、着目させることで、課題解決に生かすことのできる内容に気付くと考えた。また、その見通しを板書することで、解決の見通しをある程度もって、課題に取り組ませた。ここでは分子・分母を同じ数で割っても分数の大きさは変わらないというきまりを用いて、分母・分子を公約数で割り、より簡単な分数を導き出した。

## ③ 約分の仕組みを可視化する板書の工夫

分母と分子を同じ数で割って同値分数を見つける際に、分母と分子に共通な数を丸で囲んだり色チョークで強調したりして、約分の仕組みに児童が気付きやすい工夫を行った。そうすることで、小さな公約数で何回かに分けて割っても、最大公約数で割っても、結局は同じ数で割ることになるということや大きな数で割れば、手順が少なくすむことにも気付かせた。

## ④ 伝え方の工夫～「なぜならば～」の話型の例示・ミニホワイトボードの活用～

24/60=2/5となる理由を、「なぜならば～」を用いて説明し合う活動を行った。児童は、このような言葉を使い慣れていないため、戸惑うことが予想された。「なぜならば～、〇〇だからです。」という話型を示すことで、一人ひとりが自分の考えに理由を付けて伝えることができるようにした。また、説明する際に、ミニホワイトボードを活用して自分の立てた式を示しながら説明できるようにした。ホワイトボードを活用することで、互いの考えの共通点や違いに気付き、小グループでの話し合いがより活発になった。

### (3) 成果と課題

ピッタリ分数ゲームを導入時に行い、意欲を高めると共に学習課題への動機付けができて良かった。ホワイトボードを使い、全員の考えがわかり、種類分けをすることができ、話し合うことができた。分母と分子に同じ数をかけて同値分数を求める児童が多かったので、約分への意識の転換をどう図るかが課題となった。

## 6 研究の成果と課題

本年度は、全ての子どもが「考えをもつ」「進んで伝え合う」ための方策を考える実践に取り組み、児童の自己評価では「自分の思ったことや考えたことを進んで発表できた。」「自分の気持ちを友だちに素直に伝えることができた。」の評価が高く、成果を上げることができた。研究授業では、板書計画を作成し、指導案検討会で練り上げ、「ねらいとまとめのある板書」を毎日の授業で心掛けて取り組めた。しかし、まだ、相手の意見を聞いて、自分の意見と比較し考え、自分の意見を発表し合い、学習内容を深めていくといったことなどについて課題が残る。中学校区との取組と連携しながら、来年度も取り組んでいきたい。